

平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金（特別研究事業）  
分担研究：地域のメンタルヘルス指標の検討  
研究協力報告書

地域疫学調査による「ひきこもり」の実態調査

研究協力者 三宅由子（国立精神・神経センター精神保健研究所）  
立森久照（国立精神・神経センター精神保健研究所）  
分担研究者 竹島 正（国立精神・神経センター精神保健研究所）  
主任研究者 川上憲人（岡山大学大学院 医歯学総合研究科）

研究要旨：家族以外との社会的交流をもてずにひきこもる青少年が社会問題化する中、その量的な実態を把握することを目的として、平成 14 年度に地域疫学調査と合同で、「ひきこもり」経験に関する面接調査を行った。調査対象は岡山、鹿児島、長崎 3 県で 20 歳以上の一般住民から無作為抽出された 1646 人（協力率 56.4%）である。このうち 20～40 歳台の 690 人について「ひきこもり」経験があるか否かを調査したところ、9 人が過去にそのような経験を持っていた。現在そのような状態であると回答したものはなかった。ひきこもりの始まった年齢は 10 歳台から 20 歳台が中心であるが、40 歳台が 1 人みられた。「ひきこもり」状態にあった年齢に社会恐怖症、全般性不安障害などの診断がついたもの 4 人、全く診断がつかないもの 3 人、別の時期に社会恐怖症の診断がついたもの 1 人、診断名と「ひきこもり」の関連が不明のもの 1 人であった。「ひきこもり」経験率は 1.30%（95%信頼区間 0.45%～2.15%）であり、全国の人口による 10 歳ごとの年齢訂正を行ったところ、1.36%（95%信頼区間 0.50%～2.22%）となった。また全対象者のうち子どもがいる人について現在「ひきこもり」状態である子どもの有無と、有の場合その年齢を調査した。これを世帯単位の調査と考え、1646 世帯中 14 世帯にそのような問題が存在し、その率は 0.85%（95%信頼区間 0.41%～1.29%）であった。同一世帯に複数の「ひきこもり」がいることはなかった。この率を単純に平成 14 年度の全国の総世帯数にかけると、41 万世帯（95%信頼区間 20 万～63 万）となる。「ひきこもり」状態にある子どもの現年齢は 29 歳以下が過半数を占めるが、30 歳台、40 歳台もまれではない。調査の限界として、無作為抽出標本ではあるが協力率が 6 割弱であり、ひきこもりの問題を現にもつ人の協力は得にくかったであろうこと、および調査地点が西日本に偏り大都市部が含まれないことを考慮すると、20～40 歳台の対象者の「ひきこもり」経験率は「ライフタイム経験率」の下限值と考えるのが妥当であり、現在の「ひきこもり」の存在率も、さらに調査地点を増すことによって再検討する必要があると思われる。

## A. はじめに

近年、病気ではないと思われるのに、家族以外との社会的交流をもつことができず、家の中にひきこもる思春期から青年期の青少年の存在が、社会的な問題としてとりあげられるようになってきた<sup>1)</sup>。「ひきこもり」は精神障害として定義できるものではないが、その対策<sup>2)</sup>や予防については検討されはじめたところである。しかしその量的な実態について推測するための情報は乏しく、相談機関に来所したケースの実態調査はいくつか報告されている<sup>3-5)</sup>ものの、一般人口における量的な推測値を示しているのは、斎藤<sup>6)</sup>の文献にあるアンケート調査からの推測値のみである。

本研究は、「ひきこもり」の量的実態を推測できる資料を得ることを目的に、平成14年度に実施された精神障害の地域疫学調査と合同で行われた「ひきこもり」経験についての面接調査の結果について報告するものである。

## B. 対象と調査方法

平成14年度厚生労働科学研究「こころの健康に関する疫学調査の実施方法に関する研究」(主任研究者吉川武彦)と合同で、岡山、鹿児島、長崎の3県において、地域疫学調査を行った。調査対象となったのは、選挙人名簿から無作為抽出され、調査協力に同意した1646名の住民である。協力率は3県トータルで56.4%であった。調査はCAPI(computer-assisted personal interview: WHOによる精神と行動の障害地域疫学調査のために世界共通で使われているWMH調査票・構造化

面接質問紙コンピュータ版)による精神科診断面接法を訓練された調査員による戸別訪問の面接により行われ、「ひきこもり」セクションをCAPIに付け加える形で調査された。追加された調査票は資料として示した通りである。疫学調査全体の詳細な方法論については、平成14年度「こころの健康に関する疫学調査の実施方法に関する研究」報告書を参照されたい。

本研究では対象者のうち49歳までの対象者にはこれまでに「ひきこもり」といえる経験があるか否か、あった場合にその理由、時期(年齢)、期間などについて回答を求めた。「ひきこもり」経験をきく対象とした20歳から49歳の対象者は690人で全体の41.9%にあたる。

また対象者全体に対して子どもの有無をたずね、子どもがいる場合、その子どもの中に現在、「ひきこもり」と言える状態を呈しているものがあるか否か、いる場合にはその問題を起こしている子どもの年齢(複数いる場合には3人を上限にそのすべて)をたずねた。

ここでいう「ひきこもり」とは、「仕事や学校にゆかず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている」状態とした。時々買い物などで外出することもあるという場合もひきこもりに含めた。

なお、「ひきこもり」は精神障害ではなく、状態像として定義されるものである。「ひきこもり」経験例については、同時に調査されたICDによる精神障害診断についても検討を加えた。地域疫学調査における調査対象疾患は、気分障害、不安

障害，物質関連障害（アルコールおよび薬物乱用）であり，統合失調症は含まれていない。

#### （倫理面への配慮）

地域疫学調査における倫理上の手続きに関しては，疫学調査の基盤整備研究において，数年をかけて慎重に検討された。本研究における調査では，その研究結果に基づいた方法がとられている。対象者からは，文書による同意を得た。面接調査終了後，個人を特定できる情報は調査結果から切り離された。これらの研究に関しては，主任研究者のもとで倫理審査を受け，承認されている。

#### C：結果

##### 1. 「ひきこもり」経験について

##### (1) 「ひきこもり」あり例について

「ひきこもり」経験があると回答したのは9人で，いずれも「過去に」そのような経験があったと回答したものであり，現在そのような状態にあると回答したものはいなかった。性別は男性8人女性1人，現年齢は20歳台4人，30歳台1人，40歳台4人である。「ひきこもり」経験が始まった年齢は10歳～14歳2人，15歳～19歳3人，20歳台前半，後半各1人，40歳台前半1人，不明1人であった。

不明と40歳台を除く7人は，仕事になじめない，学校でのいじめ，なまけ，ストレスなどをひきこもりの理由とし，その期間は6ヶ月2人，1年3人，2年1人，2年半1人であった。40歳台の1人は数年前に職を失ったことによるひきこもりとしており，その期間は8ヶ月であった

という。この例はいわゆる思春期青年期のひきこもりとは質を異にするものである可能性がある。

9人のうち7人はひきこもっていたことで「困ったと感じた」と答えており，あとの2人は「何とも思わなかった」と回答している。ひきこもりの期間に誰かに暴力をふるってケガをさせたことがあると答えたものはいなかった。

9人中6人はその時期仕事や学校があったが行かなかったとしており，残りの3人は仕事も学校もなかったという。仕事や学校があったが行かなかった6人のうち，行きたかったが行けなかったと答えたものは1人であり，4人は行きたくなかったから行かなかった，1人は不明である。行きたいと行きたくないが半々という答えはなかった。またひきこもりのために仕事をやめたものは1人だけであった。ひきこもりによって学校を中退したと答えたものはいなかった。

##### (2) 「ひきこもり」経験あるものの精神障害診断

ひきこもりの年齢で社会恐怖症の診断がついたものが2人，全般性不安障害の診断がついたものが1人おり，この3人のうち2人は，小さい頃からの特定の恐怖症をもっていた。さらに40歳台のひきこもり例では，中等症うつ病エピソードと全般性不安障害があった。また社会恐怖症の生涯診断はついているもののひきこもりであった年齢時には症状がなかったものが1人，気分変調症があるがひきこもりとの関連が不明のもの1人，まったく精神障害診断のつかないものが3人

であった。

### (3) 「ひきこもり」経験の存在率

今回調査した20歳台から40歳台の690人の対象者において、過去に「ひきこもり」といえる状態を経験したことがあるものは9人であり、1.30%にあたる。この比率の95%信頼区間は、0.45%～2.15%となる。

例数が少ないので、詳細な分析はできないが、調査対象の10歳ごとの年齢階層別にみると、20歳台4人(2.31%)、30歳台1人(0.42%)、40歳台4人(1.43%)と、やや若い年齢層に多い傾向がみられた。そこで平成14年度の日本の総人口におけるこの年齢層の人口に、調査した10歳ごとの年齢階層別存在率をかけ、その和を20歳台～40歳台の日本の人口で割るといって、年齢訂正の存在率を計算したところ、1.36%となった。この比率が調査した対象数で得られたときの95%信頼区間は0.50%～2.22%となる。

## 2. 子どもの「ひきこもり」について

現在「ひきこもり」といえる状態にある子どもがいると回答したのは14人であった。いずれの例もそのような状態の子どもは1人だけであり、またいずれも自分が「ひきこもり」を経験したと回答したものではなかった。

「ひきこもり」状態にある子どもの年齢は15歳～19歳1人、20歳～24歳2人、25歳～29歳3人、30歳～34歳2人、45歳～49歳1人、不明5人であり、その親の年齢は25歳～29歳1人、30歳～34歳1人、45歳～49歳2人、50歳～54歳2

人、55歳～59歳4人、60歳～64歳1人、65歳～69歳1人、70歳～74歳2人であった。子どもの年齢が不明の5人の親の年齢は、20歳台後半、30歳台、50歳台、60歳台、70歳台が各1人であった。

対象者の属する世帯はすべて異なるので、この14という数は、「ひきこもり」状態を呈している子どものいる世帯数であると考えてよい。また、調査対象数は調査対象世帯数と同等なので、1646世帯中14世帯にこのような問題をもつ子どもが存在するといつてよいだろう。その率は0.85%(95%信頼区間0.41%～1.29%)となる。これを、平成14年度の日本の総世帯数にかけると、約41万となり、95%信頼区間は概ね20万～63万となる。「ひきこもり」が複数いる世帯は少ないと思われるので、これは現在の「ひきこもり」の量的規模を示唆する数字であると考えられる。

## D. 考察

本研究は、「仕事や学校にゆかず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている」状態として定義される「ひきこもり」について、地域疫学調査の手法を用いて一般住民に対して行った、はじめての調査である。

本調査のもつ限界としては、無作為抽出標本であるとはいえ抽出対象に対する調査協力同意率(回収率)は6割弱であり、ひきこもり状態を示すものが対象となったとしても、調査協力が得られない可能性が高いと考えられ、したがって直接のひきこもり体験としては過去の体

験をきくことになり、現在のひきこもりの実態としては、調査対象者の子どもについての資料から推測せざるをえなかったこと、調査地域が西日本に偏っており、また大都市部が含まれていないこと、などが上げられる。

調査協力に同意しない対象者からの情報は得られないので、この調査結果の限界として、この年代の「ライフタイムのひきこもり経験率」の下限值が得られると考えるしかない。その率は20歳台から40歳台の年齢層で1.30%（95%信頼区間0.45%～2.15%）であり、全国の総人口の10歳ごとの年齢構成割合で訂正した場合、1.36%（95%信頼区間0.50%～2.22%）であった。

ひきこもり経験者の数が少ないために、年齢層（年代）によってこの経験率が異なるか否かの検討はできないが、本研究のサンプルではやや20歳台が40歳台より高い数値を示しており、年代が下がると経験率がより多くなる可能性はある。この率が20歳未満の思春期青年期層でどのくらい存在するかをいかに調査するかは、今後の課題であろう。

また、ひきこもりを経験した年齢は10歳台が過半数の5人、20歳台まで含めると9人中7人が20歳台までにこのような経験をしている。また現在の、対象者の子どもにおけるひきこもりでも、ひきこもりありの14人のうち子どもの年齢不明の5人を除く9人中10歳代が1人、20歳台が5人であった。子どもの年齢不明の5人について、親の年齢が20歳台、30歳台の2人はこどもは10歳台以下であろうと推測し、親が50歳台後半以上の3人

については子どもの年齢が30歳以上と推測すると、14人中20歳台までが8人、30歳台以上が6人となる。つまり、過去の経験としてのひきこもりの問題が起こる年齢層としては、10歳台から20歳台が多かったが、現在「ひきこもり」状態にある子どもでは、それ以上の年齢層においてもひきこもりといえるような状態を示しているものが少ないとは言えない。現在ひきこもっている子どもの年齢は現年齢なので、その開始年齢はそれより若いということになるが、対象者自身の経験としても40歳を過ぎてからのひきこもりが報告されており、30歳を超えても社会的なひきこもり状態を示す例があることは、検討課題としておく必要があるだろう。すでにひきこもりの長期化についても論じられるようになってきている<sup>7)</sup>。今後の調査では、ひきこもりの子どもがいる場合、その期間を質問する項目を付け加えることにより、より詳細な検討が可能になると思われる。

対象者の子どもに現在「ひきこもり」がいるかどうかの調査は、対象者個人ではなく「世帯」を単位とした調査であると考えれば、現在の「ひきこもり」存在率を推測する資料となりうる。すなわち、1646世帯を調査して14世帯、0.85%（95%信頼区間0.41%～1.29%）にそのような子どもがいるという結果である。これから推測される全国の「ひきこもり」のいる世帯数を計算すると、約41万世帯となった（95%信頼区間は概ね20万～63万）。ひとつの世帯に複数のひきこもりがいる場合は少ないとすれば、この数字はそのままひきこもり状態にあるものの数

字となる。これは斎藤<sup>6)</sup>の示している 80 万～120 万という数字の半数以下であるが、その理由としては、調査方法の相違（アンケート調査 対 面接調査）、対象の相違（おそらく都市部の一般住民が中心で教育などに関心の高いもの 対 無作為抽出標本だが大都市部が含まれない）、などが挙げられるだろう。これらのことから、今回の推定値は、実際の値より低めにでている可能性が考えられる。

最後に、今回の調査で得られたひきこもりの経験率、存在率あるいは推測数はあくまでひとつの結果に過ぎず、今後行われる地域疫学調査から資料を追加することにより、さらなる検討が必要な数値であることを明記したい。

## 文献

- 1) 近藤直司：非精神病性ひきこもりの現在．臨床精神医学，26：1156-1167，1997.
- 2) 伊藤順一郎：「ひきこもり」ガイドラインの基本的な態度．精神医学，45：293-297，2003.
- 3) 国立精神・神経センター精神保健研究所 精神保健計画部：「ひきこもり」についての相談状況調査報告書．平成 13 年 3 月.
- 4) 伊藤順一郎，吉田光爾，小林清香ほか：「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告，厚生労働科学研究事業「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」(主任研究者：伊藤順一郎)報告書「10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン - 精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか -」付録，2003．(<http://www.mhlw.go.jp/topics/2003/07/tp0728-1.html> に掲載)
- 5) 高畑隆：埼玉県における「ひきこもり」の実態．精神医学，45：299-302，2003.
- 6) 斎藤環：社会的ひきこもりの現状と展望．思春期青年期精神医学，12：13-20,2002.
- 7) 近藤直司：青年期におけるひきこもりの成因と長期化について．精神医学，45：235-240，2003.

資料

補遺：ひきこもり セクション (WD)

---

\*WD1. 面接者チェックポイント：(対象者の年齢を見よ。)

- 対象者は 50 歳未満..... 1  
対象者は 50 歳より上..... 2 \*WD11 へ
- 

\*WD2. これまでに、仕事や学校にゆかず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっていた時期がありましたか。(時々買い物などにでることはかまわないとする)

- はい..... 1  
いいえ..... 5 \*WD11 へ  
わからない..... 8 \*WD11 へ  
拒否..... 9 \*WD11 へ
- 

\*WD3. 最初に6ヶ月以上自宅にひきこもった、そのはじまりの時、あなたは何歳でしたか。

もし「一生」または「思い出せる限りずっと」と答えたなら、たずねること:

「それはあなたが中学生になる前でしたか。」

もし「いいえ」や「不明」であれば、たずねること:

「それはあなたが20歳になる前でしたか。」

\_\_\_\_\_ 歳

- 中学生になる前..... 12  
20歳になる前..... 19  
わからない..... 998  
拒否..... 999
-

**\*WD4.** 最初にひきこもりがはじまった理由やきっかけは何でしたか。簡単に教えてください。

---

---

---

---

**\* WD5.** 6ヶ月以上ひきこもっていた期間のうち、一番長い期間は、何ヶ月あるいは何年くらい続きましたか。

もし「一生」や「思い出せる限りずっと」であれば、995年と記入しなさい。

\_\_\_\_\_ ヶ月 または \_\_\_\_\_ 年

わからない.....998

拒否 ..... 999

**\*WD6.** 6ヶ月以上自宅にひきこもっている状態が続いていた最後の時期はいつですか。 - 過去1ヶ月、2から6ヶ月前、7から12ヶ月前、あるいは12ヶ月以上前のどれですか。

過去1ヶ月..... 1 \*WD7へ

2から6ヶ月前..... 2 \*WD7へ

7から12ヶ月前..... 3 \*WD7へ

12ヶ月以上前..... 4 \*WD7へ

わからない..... 8 \*WD7へ

拒否..... 9 \*WD7へ

**\*WD6a.** 6ヶ月以上自宅にひきこもっている状態が続いていた最後の時、あなたは何歳でしたか。

\_\_\_\_\_ 歳

わからない..... 998

拒否..... 999

**\*WD7.** 6ヶ月以上自宅にひきこもっていたことで、イライラしたり、恥ずかしく思ったり、あるいは困ったと感じましたか。あるいは別になんとも思わなかったですか。

困ったと感じた.....1  
何とも思わなかった.....2  
わからない.....8  
拒否.....9

---

**\*WD8.** あなたが6ヶ月以上自宅にひきこもった最初の時から数えて、今までに何回ひきこもりをやめる真剣な努力をしましたか。

\_\_\_\_\_ 回

わからない.....998  
拒否.....999

---

**\*WD9.** 6ヶ月以上ひきこもっていた期間に、つい暴力をふるって誰かにケガをさせてしまったことがありましたか。

はい.....1  
いいえ.....5  
わからない.....8  
拒否.....9

**WD9a.** それはどのくらいの頻度でありましたか。しばしばですか、時々ですか、まれにですか。

しばしば.....1  
時々.....2  
まれに.....3  
(自発的に)一度だけ.....4  
わからない.....8  
拒否.....9

**WD9b.** 暴力をふるってしまった相手は誰でしたか。家族や同居している人でしたか、それともそれ以外の人でしたか。

- 家族や同居人 ..... 1
  - それ以外の人 ..... 2
  - (自発的に) 家族もそれ以外の人もある ..... 3
  - わからない ..... 8
  - 拒否 ..... 9
- 

**\*WD10.** その期間には、仕事や学校があるのに出かけてゆかなかったのですか。あるいは、ゆかなくてはいけない仕事や学校は特にありませんでしたか。

- 仕事があったがゆかなかった ..... 1
- 学校があったがゆかなかった ..... 2
- (自分から) 仕事も学校も両方あったがゆかなかった 3
- 仕事も学校はなかった ..... 4    **\*WD11** へ
- わからない ..... 8    **\*WD11** へ
- 拒否 ..... 9    **\*WD11** へ

**\*WD10a.** 仕事や学校には行きたかったのに行けなかったのですか。あるいは、どちらかという、行きたくなかったので行かなかったのですか。

- 行きたかったが行けなかった ..... 1
- 行きたくなかったので行かなかった ..... 2
- (自分から) 行きたい気持ちと、行きたくない  
気持ちが半々だった ..... 3
- わからない ..... 8
- 拒否 ..... 9

**\*WD10b.** 6ヶ月以上自宅にひきこもったために、仕事をやめたり、あるいは学校を中退したりしましたか。

- はい ..... 1
  - いいえ ..... 5
  - わからない ..... 8
  - 拒否 ..... 9
-

**\*WD11. 面接者チェックポイント (対象者には子供がいるか)**

少なくとも1人..... 1  
ほかすべて ..... 2 セクションの終わりへ

---

**\*WD12. あなたの子供のうちで、現在、仕事も学校もゆかず、かつ家族以外の人と交流せず、6ヶ月以上自宅にひきこもっているお子さんがいますか。**

はい..... 1  
いいえ ..... 2 セクションの終わりへ  
わからない..... 8 セクションの終わりへ  
拒否..... 9 セクションの終わりへ

**WD12a.** そういうお子さんはおひとりですか。それとも何人がいますか。

\_\_\_\_\_ 人

**WD12b.** そのお子さんは何歳ですか(ひきこもりの子供が3人以上いる場合は、3人まで記入すること)

1人目 \_\_\_\_\_ 歳 2人目 \_\_\_\_\_ 歳 3人目 \_\_\_\_\_ 歳

**セクションの終わり**